
ブラッシュマン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラッシユマン

【Nコード】

N1882F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

お節介な精霊ブラッシユマンは近くの村の娘を助けた。ところが実は助けたというには微妙で。ネイティブアメリカンに伝わる伝承を小説にしてみました。

第一章

ブラッシユマン

アメリカ原住民の間に伝わる古い話である。彼等は必ずこの話を聞いて成長するという。

ブラッシユマンという精霊がいる。お節介ばかり働きあまり人々から好かれてはいない。むしろ嫌われている。その彼がある時野原で一人くつろいでいた時だ。不意に彼の前にある部族が横切った。見れば彼が今いる場所の近くにいる部族の一つであった。

その中に一人可愛い娘がいた。小柄で色は白く目が黒く星の様に美しかった。その娘を見て彼はまたおせっかいを焼くことになった。

「あつ」

彼女が不意に持っていた箱を落としてしまったのだ。

「しまったわ、こんなところで」

「おい、早く拾え」

彼女の隣にいたおそらく父親と思われる初老の男が咎める顔で彼女に言ってきた。

「皆急いでいるんだぞ」

「え、ええ」

「それで何を落としたんだ？」

「針箱よ」

申し訳なさそうに父親に告げる。

「それ落としたのよ」

「また厄介なのを落としたな」

父親はそれを聞いて余計にうんざりとした顔を見せた。

「まあいい。とにかく拾え」

「うん」

何はともあれその針箱を拾うことになった。それを見たブラッシ

ユマンは。早速そのお節介を働くことになってしまったのであった。
「あの娘困ってるな」

これははつきりとわかった。

「あんな顔をして箱を拾って」

素直に可哀想だと思う。ここまではよかった。だがここからが。
問題なのだった。

「よしっ」

何を思ったかいきなり嵐を起こしたのだ。しかも大嵐だ。突然出て来た嵐で人々は大混乱に陥ってしまった。

「な、何だ急に！」

「この嵐は何だ！」

誰もが驚いて声をあげる。

「何とか逃げろ！」

「離れるな！」

声が錯綜する。最早混乱は明らかだった。

「子供の手を握れ！」

「荷物を守れ！」

誰もが必死に子供や荷物を守ろうとする。そんな中ブラッシュマンは一人部族の方に歩いていった。外見は人間と同じ、しかも若くて逞しい男だったので誰も不思議には思わなかった。何よりも嵐に気を取られてそれどころではなかったのである。それが彼にとって
は幸運であった。

そしてその彼は娘のところに来た。娘は嵐の中必死に針箱を持って家族を探していた。

「お父さん、お母さん」

両親を呼ぶ。箱は両手で大事に持っている。

「何処なの？何処にいるの？」

「皆大丈夫だよ」

その彼女に声をかける者がいた。

「死んだりしないから大丈夫だよ」

「大丈夫って」

「君、困ってるよね」

娘が何が何だかわからないうちにまた彼女に声をかけてきた。

「今凄く」

「確かに困ってるけれど」

「針箱を落として」

このこともまた彼女に言う。

「だからさ。ここは逃げよう」

「逃げる!？」

「うん」

穏やかな声で彼女に答えるのだった。

「皆君に冷たいし。だから」

「冷たいって」

「こつちだよ」

やはり娘が答える前に動くのだった。彼女が何か言おうとしたらもうその手を掴んでいた。そしてそのまま何処かへと消えるのであった。

第二章

娘が気付いた時いたのは。何と洞窟の中だった。とてつもなく大きな洞窟の中に。彼女は見たこともない背が高く逞しい身体の若者と一緒にいたのであった。

「ここは一体」

「僕の家だよ」

若者は微笑んで娘に答えてきた。

「僕の家なんだよ」

「貴方の家って」

「だから。僕の家なんだよ」

微笑んで娘に答えたのだった。

「ここは。僕の家なんだよ」

「あんたの家って」

娘は彼に何度も同じことを言われたので少し苛立ちを覚えていた。

「ここがなの？」

「何かおかしいかな」

「洞窟に棲んでるって」

彼女の部族ではテントを張ってその中で暮らしている。だから洞窟で暮らしているということはまず考えられない。それ以上に洞窟というところからあることを感じていた。

「ひよつとしてあんた」

「僕はブラッシュマン」

自分から名乗ってきた。

「ブラッシュマンだよ」

「あのブラッシュマンだったの、あんたが」

娘は今それをはつきりと聞いて顔を顰めさせた。

「あのお節介焼きの」

「お節介？」

ブラッシュマンはお節介と言われてもそれを理解することはない。常に善意で動いているつもりだからこれは当然のことである。

「お節介って何かな」

「わからないの？自分が何したのか」

「君が困っていた」

顔を顰めさせて言ってきた娘に対しても的外れな調子で言葉を返す。

「だから助けてあげただけけれど」

「じゃああの大嵐はあんたが」

「うん」

こくりと頷いてみせた。

「そうだよ」

「そうだよって。全く」

今度は慥然とした顔になる娘であった。

「そんなことして。何考えてるのよ」

「考えるも何も僕はいいことをした」

「いいことをしたって何処がよ」

「君を助けた」

あくまでそのつもりなのだ。彼は。

「だから。僕はいいことをした」

「いいことをした！？どういう思考回路をしていればそうなるのよ」

ここまで来ると理解不能であった。そもそも彼は人間ではないのだからこれも当然なのだがそれでも娘は色々と言いたかったのであった。

「全く。さて、と」

「さて、と？」

「早く帰らないとね」

起き上がってブラッシュマンに対して言う。

「皆が心配しているから」

「皆って誰だ？」

ブラッシュマンは何が何なのかわからないといった顔で娘に尋ね

た。

「誰なんだ？皆って」

「だから。お父さんとか」

本当に馬鹿なのではないかと思いつながら彼に言い返す娘だった。

「村の皆よ。他に誰がいるのよ」

「君に意地悪をしている人達のところに戻るのかい？」

ブラッシユマンは顔にどうしてと書いてまた娘に尋ねる。

「あんな人達のところ。どうして」

「意地悪なんかされていないわよ」

その無然とした顔で彼にまた言い返す。

「そんなことはないの」

「ないの？」

「お父さんよ」

「お父さん」

精霊であるブラッシユマンには家族というものはいない。彼だけが
いるのだ。

「何かな、それは」

「私の家族だけれど」

「家族？」

「大切な人よ」

ブラッシユマンが全く何もわからないのを見てまた彼に言う。

「大切な人。私を産んで育ててくれたね」

「大切な人なんだ」

「そして村の人達も同じよ」

今度は村の人達のことも言うのだった。

「私の大切な人達よ」

「けれどその大切な人達が」

ブラッシユマンはまだ彼女に告げる。

「君に悪いことをした。意地悪をしていたじゃないか」

「意地悪って」

「君が針箱を落とした時」

その時のことを話すのであった。

「あの時早くしろとか言っていたじゃないか。あれは」

「あれは私が悪いの」

「君が悪い？」

「そうよ」

娘の今の顔は口が尖っていた。まるで鳥のように。

「私が悪いのよ。針箱を落とした」

「そうなのか」

「そうよ。私が悪いの」

あらためてこのことをブラッシユマンに話すのであった。むくれた顔で。

「箱を落としたね。わかったわね」

「そうだったのか」

「そうよ。あとね」

娘はさらにブラッシユマンに対して問う。

「皆は何処に行ったの？」

「村の皆が？」

「そうよ。何処に行ったのよ」

「まだ野原にいるよ」

ブラッシユマンは静かにこう答えた。

「嵐も終わったから。今はほっとしていると思うよ」

「だったらいいけれど」

「別に誰も困らせるつもりはないから」

少なくとも悪気はないのだ。だからこそ問題であるとも言えるのだが。

第三章

「そこにいるよ」

「そうなの。よかった」

それを聞いてまたほっと胸を撫で下ろすのだった。とりあえずはである。

「それだったら」

「それでどうするの？」

ブラッシユマンはまた娘に対して尋ねる。茫洋とした調子で。

「戻るの？ やっぱり」

「ええ、そのつもりよ」

きつい目でブラッシユマンを見ながら答える。

「帰るわ。皆のところ」

「そういえば君」

ここでブラッシユマンはあることに気付いた。娘を見て。

「随分濡れてるね」

「あんたのせいだよ」

今の言葉を聞いてまたむくれた顔に戻る娘であった。

「あんたが嵐なんて起こしたから」

「じゃあ村の皆も同じだね」

「そうよ、同じよ」

そのむくれた顔でブラッシユマンに告げる。

「もうすぐ夜になって寒くなるのに。何てことをしてくれたのよ」

「わかった」

しかしここでブラッシユマンは不意に言ったのであった。

「事情はわかった。ブラッシユマンが悪い」

「わかってもね。どうするつもりよ」

「やれることがある」

彼は言うのだった。

「皆をここに呼ぶ」

「皆つて？」

「だから君の村の皆を。ここに呼ぶ」

「呼んでくれるの？」

「ここには雨は降らない」

これは言うまでもないことだった。洞窟の中にまで雨は降ってはこない。それどころか風も入らず程よい暖かさにもなっている。実に過ごし易い場所であった。

「だから。ここに皆を呼ぶ」

「けれど服とかは濡れたままよ」

「それも心配ない」

彼はまた娘に告げた。

「僕服一杯持つてる。本当に一杯持つてるから」

「いいのね」

「勿論君の服も持つてる」

笑顔で娘にも告げた。

「だから着替えればいい。それに」

「それに？」

「お詫びに皆に御馳走する」

こつも言つのであった。

「だから皆で楽しもう。それでいいよね」

「まあそこまで言ってくれるのなら」

娘としても反対する理由がなかった。確かに迷惑なことをされたが服は着替えさせてくれるし食べ物まで御馳走してくれるのなら。それに越したことはないからだ。

「いいわよ。それで」

「じゃあすぐに呼ぶ」

娘の言葉に頷くとすぐに両手を掲げた。そうして何やら呪文を唱える。

暫く呪文を唱えていたがそれが終わると。広い洞窟の中に娘の村

の人達が皆来ていた。誰もが突然洞窟の中に来たので目を白黒させている。

「何だこじ」

「洞窟!? おかしいな」

「さっきまで野原にいたのに」

「そうだよな。嵐にあつて」

「それがどうして」

「僕が呼んだ」

洞窟の中を見回して驚いている彼等に対してブラッシユマンが告げたのだつた。

「僕が皆を呼んだ。このブラッシユマンが」

「えっ、ブラッシユマン!？」

「あんたがか」

皆ブラッシユマンのことは知っていた。お節介焼きで迷惑ばかりかける精霊としてだ。彼等の中にも彼に迷惑を受けた者が結構いたのである。

「俺魚釣つてたらとんでもなく大きな魚が出て来て襲われたぞ」

「食べがいがあるだろうと思つて」

「あんな大きな魚があるかつ」

壮年の男は釣りで彼のお節介を受けたのだ。

「あんな馬鹿でかい魚。危うく食べられそうだったぞ」

「私だつてそうよ」

今度は中年の女が言う。むくれた顔になつて。

「とうもろこしにお水をやっていたら台風になつて」

「水、いるかと思つて」

「台風はやり過ぎよ」

こつ言つてブラッシユマンを見据える。

「危うくとうもろこしが駄目になるところだったじゃないの」

「御免、勘違いだった」

女に対して頭を下げる。彼のお節介と迷惑は昔からなのだった。

「それで今回もかい？」

「あの嵐はあんたが」

「そう」

申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。

「僕がやった。これ間違いない」

「またどうしてあんなことを」

「訳がわからないよ」

「私の為だったらしいわ」

「御前の為!？」

「ええ」

娘がここで言って村人達に答える。

「私が針箱を落として怒られているところを虐められてるって勘違いして」

「それでか」

「そう、それでなのよ」

こう村の人達に語る。

「それで嵐を起こして私を助けたらしいのよ。嵐で皆が戸惑ってる間に私を助けてこの洞窟にね」

「成程、そうだったのか」

「それでか」

村人達はここまで話を聞いてまずは嵐のことはわかったのだった。

「それであの嵐が起こったのか」

「全く」

「僕の勘違いだった」

またこう言って謝るのだった。

第四章

「本当に御免なさい」

「まあ皆無事だったらよかったようなものに」

「おかげで濡れ鼠だよ。風邪をひかなかつたらいいけれど」

「だから僕皆にあげる」

顔をあげて村人達に告げた。

「服、あげる」

「服をかい」

「そう、皆それに着替えて」

まずはこう皆に言うのであった。

「そしてもう一つお詫びに」

「お詫びに」

「御馳走ある。皆食べて」

「御馳走が」

「とうもろこしに七面鳥の肉」

彼等に料理を教える。

「お魚も果物も一杯ある。それ食べて」

「くれるのか、わし等に」

「うん」

皆に対してこくりと頷いて答えた。

「あげる。お詫びに」

「そうか、それでは」

「後この洞窟も皆にあげる」

「洞窟もか？」

「僕けちじゃない」

これはブラッシュユマンの誇りだった。彼は少なくとも吝嗇ではないのだ。

「だからいいよ。洞窟も皆にあげる」

「いいの？」

その彼に娘が問うた。彼の顔を見ながら。

「貴方のお家なのに。それでもいいの？」

「いい」

こつ尋ねられても彼の考えは変わることがなかった。

「それでも。僕はいい」

「お家をあげてもって」

「お家はここにあるだけじゃない」

だからだとも言うのだった。

「他にも一杯ある。だからいい」

「そうなの」

「僕人の笑顔が好き」

実はそうなのだ。彼は常に悪意はないのだ。ただその行動が結果として迷惑になってしまっているだけで。悪意は全くないのである。

「だからいいんだ」

「そうなの。じゃあ」

「うん、皆使つて」

またこつ告げた。

「皆で。それで僕は嬉しいから」

「そう。それじゃあ」

まずは娘が彼の言葉に頷くのだった。

「皆もそれでいいかしら」

「まあブラッシュマンがいつて言つんなら」

「わし等も別に」

反論はなかった。何しろ持ち主が言っているのだ。だからここは皆頷くのだった。

「それでいいよ」

「あんたがいいんなら」

「これで決まりだね」

ブラッシュマンは皆が受けてくれたのを確かめて笑顔になった。

「服も食べ物も洞窟も」

「ええ」

娘がまた皆を代表して頷く形になっていた。

「わかったわ。使わせてもらうわ」

「それでいい。僕嬉しい」

ブラッシユマンは満面に笑みをたたえていた。そうしてまた言う。

「皆使つて。楽しくね」

「ええ、それじゃあ」

「使わせてもらうよ」

「けれどブラッシユマン」

ここで村人達は彼に声をかけるのだった。

「何？」

「このまま消えるのかい？」

「まさかとは思うけれどわし等の前から消えるのか？」

「そのつもりだったけれど」

実はそうだったのだ。村人達に全部渡して自分は別の家に消えるつもりだったのだ。しかしここで。皆はその彼を呼び止めたのである。

「何なの？」

「何なのじゃなくてだよ」

「ここにいてくれるか」

「けれどここは」

皆にあげた。それでこう言われることがわからなかったのだ。

「皆にあげたから。もう」

「何言っているんだ。土地は皆のものじゃないか」

「そうだよ。洞窟だって同じだよ」

この土地は皆のものだという考えは北米のネイティブアメリカン特有の考えである。だから後に多くの移民達に土地を奪われることにもなってしまうのだが。しかし彼等は今はこの考えでブラッシユマンを呼び止めたのであった。

「だからさ。残ってくれよ」

「それで時々は村にも遊びに来てくれ」

「いいの?」

思わぬ言葉を聞いてほぼ無意識に彼等に問い返した。

「それでいいの?僕がいて」

「いいよ。だから皆のものだからな」

「皆で何かあれば祝えばいいじゃないか」

「そう、皆で」

村人達の言葉を聞きながら呟く。

「祝えばいいんだ」

「何かあればな」

「その代わりね」

また娘が彼に言う。

「もう迷惑なお節介は止めてね。少しの親切で充分だから」

「うん、じゃあ」

ブラッシュマンもその言葉を受けた。そうして頷いた彼を皆が受け入れる。皆の友達になったブラッシュマンは以後お節介をすることを慎み小さな親切のみを心掛けた。その彼のトーテムポールが村に作られそれが友情の証となった。誰もが彼を愛するようになった時のことであった。

ブラッシュマン 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1882f/>

ブラッシュマン

2010年10月8日15時04分発行